

◆平成 21 年度 第 3 回(通算第 8 回) 蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2009 年 6 月 19 日 (金)

場所：G4 棟 2 階 総合理工学研究科大会議室

アフガニスタンにかけた青春：ある東工大異端児の半生

野口 壽(寿)一 (1972 電化) (株)ソリトンシステムズ新規事業開発部長, 元・(株)キャラバン社長

司会者いわく波乱万丈の、本人いわく破天荒な、そのような野口さんの人生は 鹿児島生まれと関係が深そうだ。子供の頃にゲルマニウムラジオ (鉱石ラジオ) を自作し、北京放送を聞いた。地理的に北京に近くよく聞こえたらしい。一視聴者として、便り (SINPO レポート) を送ったら、先方もさすがに宣伝上手で、毎年カレンダーを送ってくるようになった。このカレンダーの写真が後に野口さんの人生を変えることになるから人生は不思議だ。野口少年はゲルマニウムラジオを自作する理科少年だったのみならず、文化の香りにも敏感だった。高校の時にはシルクロードへの夢が膨らみ、一方では、ヒマラヤ山脈を徒歩で越え、鎖国状態にあったチベットに潜入して仏典の原型 (大蔵経) を入手した河口慧海 (1866-1945) の命がけの行動にひきつけられた。物議をかもした「チャタレー夫人の恋人」も読んだ。訳者の伊藤 整が東工大教授だったこともあって、東工大に行けば文系と理系の両方が勉強できると胸をふくらませて本学に入学した。

時まさしくベトナム戦争の頃で、学生運動も盛んだった。正義感の強い野口さんにとっては放っておけない問題だったろう。野口さんより一学年上だった私は化学科の同志と一緒にベトナム戦争反対の立看を作ったのを覚えている。日和 (ひよ) った私たちとは違い、野口さんは学業との両立に悩みながらも、社会や民族の在り方に対する嗅覚を研ぎすましていく。当時の人文社会系の教授陣は今でも野口さんの心よりどころであり、東工大卒であることを誇りに思うゆえんらしい。イランのハタミ大統領が 2000 年来日した際に、東工大で文明の「衝突」でなく「対話」を呼びかける講演をしたと聞いて、涙が出るほど嬉しかったそう。確かに、国会での演説を除けば、ハタミ大統領が講演したのは東工大のみだ。古いが、アインシュタイン来日の際にも本学は講演会の開催に成功している。2006 年に設置された世界文明センターも、野口さんにとっては、「さすが我が母校 東工大」と感激したそう。開所式には私も出たが、実に質素なものだった。外からこれだけ熱い視線を浴びていたとは予想外だ。センター長の Roger Pulvers の言葉は記憶に値する: A university is a place of encounter. Here we encounter ideas,

people, and dreams.

卒業時のことは聞き漏らしたが、卒業年 (1972) からして、大学紛争が収束に向かった頃だ。大学紛争を傍観していた 2 世議員達が日本の政治を動かしている現状をどう思うかと野口さんに質問しようかとも思ったが、格調高い人類愛の話に水を差してはとおもいとどまった。

出版・印刷・情報流通に関わりながら、編集していた雑誌に掲載された記事がアフガニスタンからの留学生の目にとまった。1979 年のことで、ソ連のアフガニスタン侵攻で世界が大騒ぎになっていた。マスコミは連日、激しい戦闘のもとで市民は恐怖にかられていると騒ぎたてていたが、人々の実際の暮らしは伝わってこない。子供のころからのシルクロードへの思いとアフガンの真実と民衆の暮らしをこの目で見たいという野口さんの思いが留学生を動かしたのだろう。その留学生の仲介で駐日アフガニスタン大使に会い、アフガニスタン行きが実現する。1980 年のことである。西側ジャーナリストに発給されたビザの第一号だったそう。40 日間にわたって現地を見てまわり、帰国後「新生アフガニスタンへの旅」を出版し、人生が変わった。当時の写真に解説を加えながら、何気なく「緯度は横浜と同じ…」、「ポプラは乾燥に強い…」、「エンジンの原産国…」、「街中の匂いはきつかったが、ナンはうまかった…」とおっしゃったのが印象に残っている。命の危険はまったく感じなかったそう。アフガニスタン行きを必死で止めたであろう周囲の関係者と真実を知りたいという一心のみでアフガニスタンに向かった野口さんの対比を思うと鳥肌がたった。レイビトンのバッグを求めて飛行機に乗る人もいれば、黒塗りの車での送迎にこだわる人もいる。人を動かすのは何だろう。野口さんならば、「人は多様だからこそいいのですよ」と、こんな些細なことは気にならないかもしれない。

野口さんが賞賛した企業人がいる。雨宮 清 (蔵前工業界の理事長である庄山さんが会長をしている日立グループの山梨日立建機社長)。TV でも話題になったが、初めてという人はインターネットで検索して

みよう。

アフガニスタンはソ連侵攻と 2001.9.11 に続く米軍侵攻で混迷の度を深めていくが、野口さんの見方はこうだ。ソ連侵攻は、アフガニスタン内部の一派が自分たちの利益のためにソ連軍に頼んで来てもらったという傭兵的な一面があるが、米軍の場合は宣戦布告なき戦争のようになっており致命的間違いだった。アフガニスタンもれっきとした国家なのだから、9.11 の首謀者を引き渡すよう迫り、あくまで警察行動としての解決を図るべきだったと。野口さんの信念はこうだ：暴力を暴力で解消することはできない；人の心を暴力で抑えつけることはできない；戦争をしてはいけない。いったん戦争となれば、無駄な死を強制され、人が物以下の扱いを受けることは、過去の歴史のみならず、紛争地帯の現実を見れば明らかだと強調された。そして現在の紛争の多くは、イギリス植民地支配の負の遺産だという話は、私にとっては世界情勢を理解する上で目からウロコだった。

た。

野口さんのキーワードは、若いころは「ヒューマニズム」だったが、いまは「自然と調和するヒューマニズム」でないとダメだと思うようになってきているそう。アフガニスタンの現地等を見てようやくたどり着いた野口さんの境地に共鳴した聴衆も多かったに違いない。だとすれば野口さんにとっても“異端児”冥利につきるかもしれない。

(追伸) 1. 献身的にアフガニスタン支援に取り組んでいた伊藤和也 (31) さんが現地で殺害されるという痛ましい事件があった。「なぜか？」という学生からの質問に、野口さんはこう答えた：非イスラム教外国人による支援を快く思っていないグループによる見せしめではないかと。2. ベトナム戦争に抗議して 1968.11.11 焼身自殺した同窓の先輩 (由井忠之進, エスペランチスト) がいたという話も心にとめておきたい。

日本の自動車とともに歩んで

遠藤 卓朗 (1948 機械) 元・日産自動車副社長, ㈱日産ディーゼル工業社長

遠藤さんは子供の頃から動くものと工作が好きだった。動くものなら大小を問わない。大型車のみならず船舶の操縦免許まで持っている。家には今でも工作室があり、たいいていの機器は揃っている。ビールの空き缶をつなげて太陽光温水装置を作ったり、お孫さんの自転車を改良したりと、85 歳の今も、忙しい。ピアノの腕前もかなりのもので、芸能大会の音頭取りを務めている。先日も大岡山駅前に完成した TTF (東工大 蔵前会館) のオープニングセレモニーで留学生をも取り込んだショーを企画し、自らピアノを弾いた。

さて、話の内容だが、世話人の関口さんの 次のような予想がピタリと当たった：「遠藤先輩は 日本の自動車工業の黎明期から 現在までを日産自動車に身をおいて見てこられ、特に戦後早々 (1954) 若い時にイギリスに自動車工業を学びに行かれた経験談を中心に、自動車にかけた技術屋の心意気をお話になるものと期待しています」。加えて、日米の貿易摩擦の舞台裏や、ここ 50 年間で見ると 国内における乗用車の生産台数が日本 (500 倍) に対し、英国 (2 倍)、ドイツ (8 倍)、米国 (0.5 倍) と大差がついた理由を一言で言えば、Customer's Satisfaction を経営の中心に据えたかどうかだと強調された。大学の Customers は、学生と社会になるのだろうかかと真剣に考えさせられた。

遠藤さんは機械学科の卒業だが、入社早々 担当させられたのは車体 body だった。動くものが好きで、しかも専門が機械なのだからエンジンやトランスミッションをやらせてくれてもいいのにと最初は多少不満だった。しかし何が幸いするか分からない。ボディ プレスの専門家は少なく、やりがいのある分野だったのだ。若くして英国オースチン社に派遣されたのもそのお陰だ。英国に向かう途中、飛行機の調子が悪くなり、エジプトに立ち寄った。修理の間にピラミッド等を見て歩いたそう。ピラミッドを近くから見ると どう見えるか。予想外の答えで驚いたが、当時のカラーライドで解説していただいた。見ての楽しみということで、ここでは種明かしはしない。オースチン社のあるバーミンガムでは、下宿生活をするようになった。そこにはパットさんという娘さんがいて となるとまるで小説になるような話だ。彼女のカラー写真も印象に残った。色は多少あせ気味だったが、シャッターを押したカメラマンの気持ちが当時のまま残っているような気がしたからだ。

遠藤さんが後輩に伝えたい 5 か条：① 先ず健康 (無遅刻・無欠勤)、② 家庭 (家庭内のトラブルは外にでる)、③ 与えられた仕事をきちんとこなし、その分野の第一人者になる (小さな仕事でも最初が肝心)、④ 社内での人付き合い (上司へのオベンチャラは禁、

文化面での多少の教養), ⑤ CS (Customer's Satisfaction) 経営。松下幸之助の“モノを作る前に人を作る”が本質だそう。人を作るべき大学が書類の山を作っているのいいのだろうか心配になった。

2030年 自動車はどうなる?との質問に、「正直、わかりません。それは若い君たちが考えることだ」と前置きしつつも、いくつかのヒントをくださった。

本ゼミへの出席者の利益を考えると詳細を明かすわけにはいかないが、自動車の役割・使命から考えればいいのだ。部外者の私が聞いてもなるほどと思えたから、自動車産業に進みたい学生にとっては貴重な指針になるだろう。これだけでも今日の講演を聞いた価値は十分にあったはずだ。自動車産業は総合力(機械・電気・化学・IT)というのも就活中の学生には参考になったのではないかな。

(生命理工学研究科 生体システム専攻 教授 広瀬茂久)